地域と共に女性人材育成
岩手大学15年の取り組み

海妻径子（岩手大学副学長・ダイバーシティ推進室長）

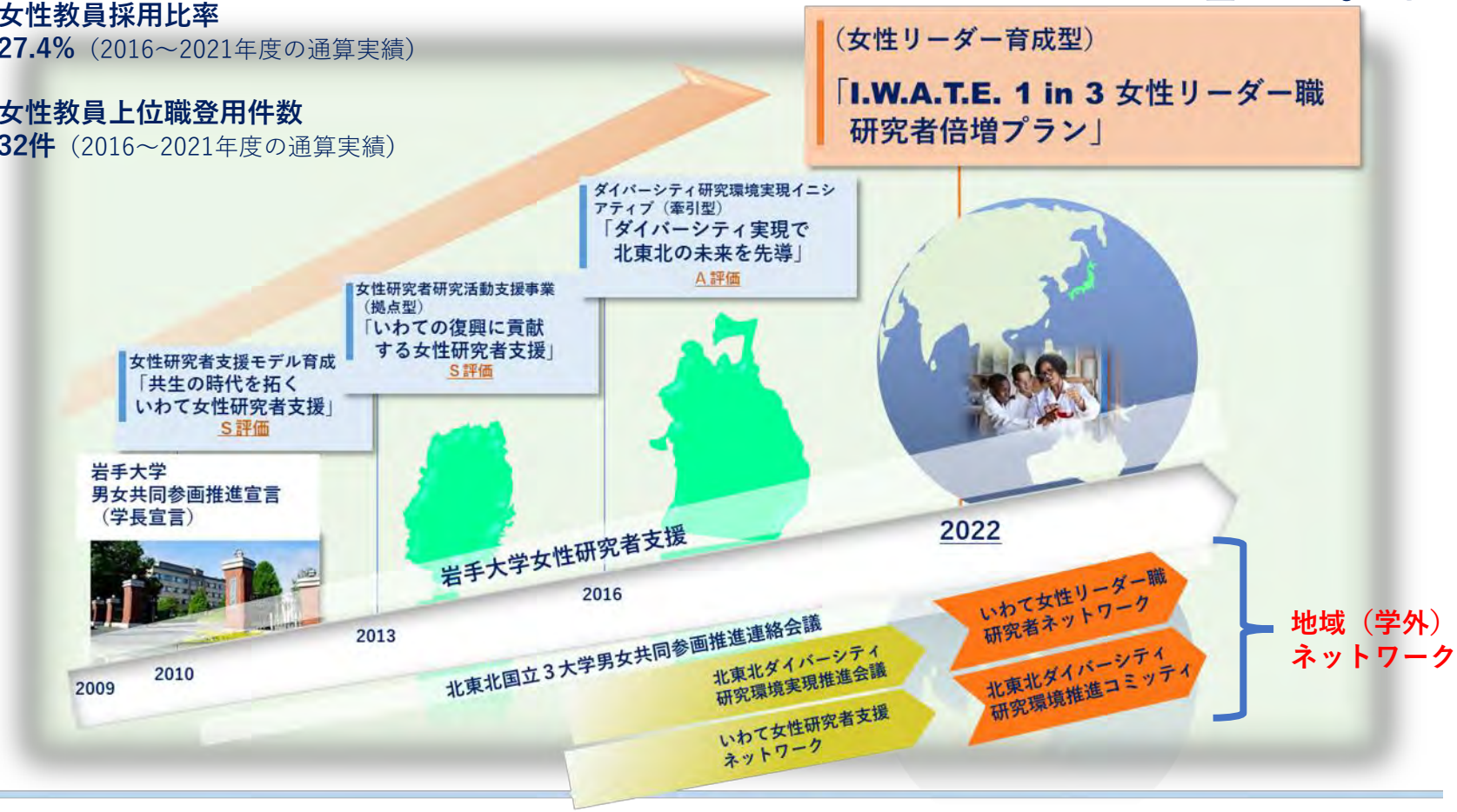
岩手大学男女共同参画・ダイバーシティ推進のあゆみ

◎女性研究者在職比率
8.9%（2009年）➡ 17.2%（2022年）

◎女性教員採用比率
27.4%（2016～2021年度の通算実績）

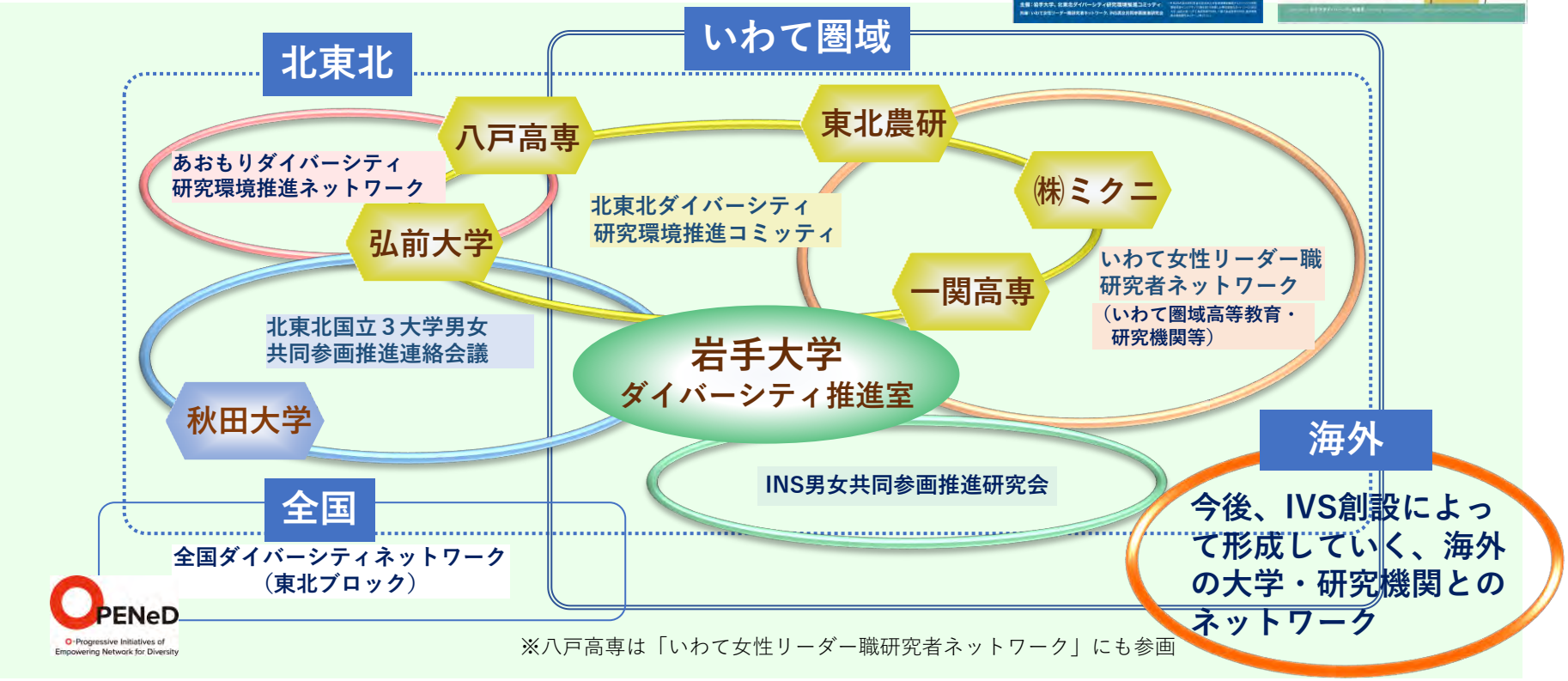
◎女性教員上位職登用件数
32件（2016～2021年度の通算実績）

◎女性教授比率
6.3%（2021年）➡ リーダー層の厚みを十分に形成するに至っていない！



岩手大学女性人材育成に関する地域（学外）ネットワーク

北東北国立３大学男女共同参画推進連絡会議で持ち回り開催しているシンポジウムのチラシ（右）と、北東北ダイバーシティ研究環境推進コミッティで開催している「北東北女性研究者研究・交流フェア北東北交流フェア」のチラシ（左）



※八戸高専は「いわて女性リーダー職研究者ネットワーク」にも参画

岩手大学男女共同参画推進宣言（学長宣言）

「岩手の“大地”と“ひと”とともに」

2004（平成16）年4月、国立大学法人化に際して岩手大学が掲げたこの校是により、私たちの行動指針として、岩手大学の進むべき方向性を示してまいりました。

2009（平成21）年6月に新制総合大学として創立60周年を迎えた岩手大学が、これからも地域社会に開かれた大学として発展するためには、男女共同参画が不可欠であり、その実現には、男女、様々な年代層が学びやすく、ワーク・ライフ・バランスに配慮した、働きやすい環境整備を進めることが必要です。

私たちがめざす、協力と互恵の精神に基づく持続可能な共生社会を形成するため、以下のような取り組みをもとに、地域社会の範となるべく、男女共同参画を積極的に推進することを宣言します。

1．教職員が仕事と生活を両立できる環境を整備し職場における男女共同参画を推進します

2．次世代を担う学生に向けて男女共同参画にかかわる教育を推進します

3．教員の教育研究活動の継続的な発展を支援し研究における男女共同参画を推進します

4．協力と互恵の精神に基づく持続可能な共生社会の形成に向けて男女共同参画の推進を地域社会に発信します

女性研究者支援モデル育成「共生の時代を拓くいわて女性研究者支援」：地域との連携・地域への発信を当初から意識

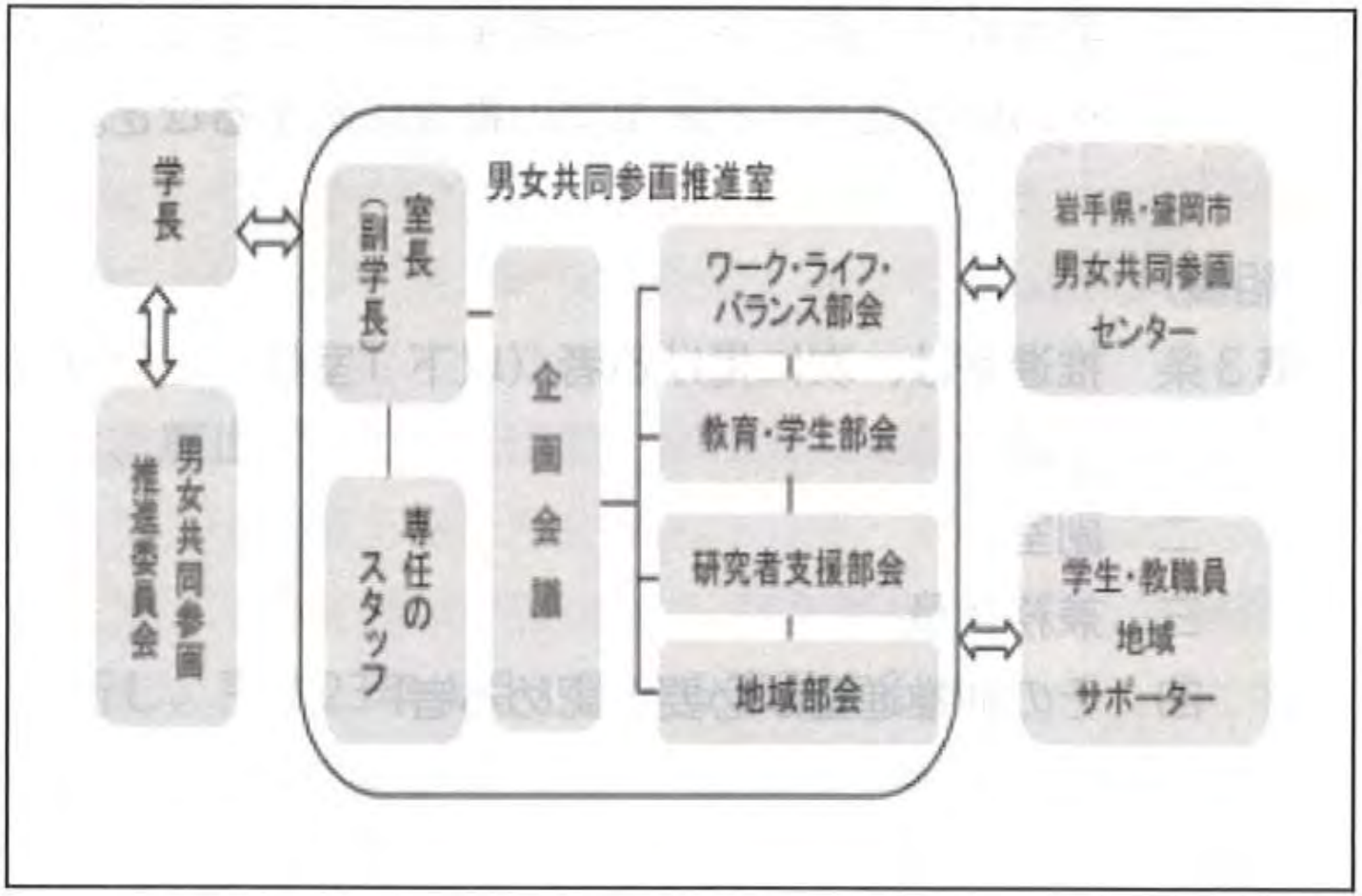
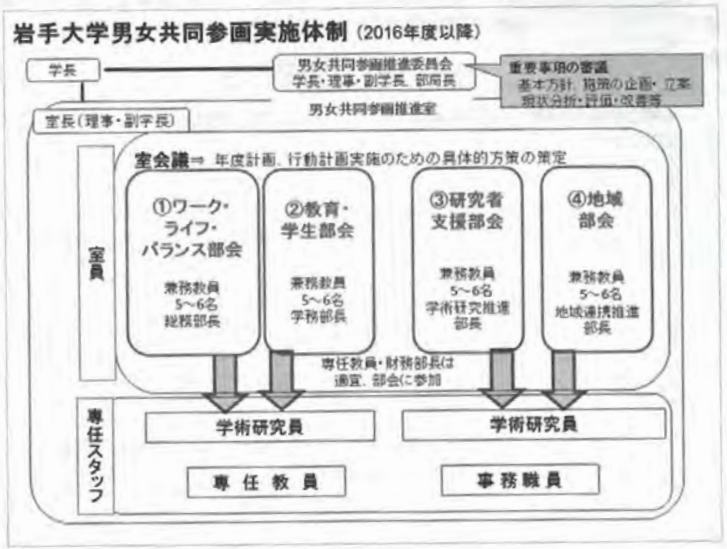
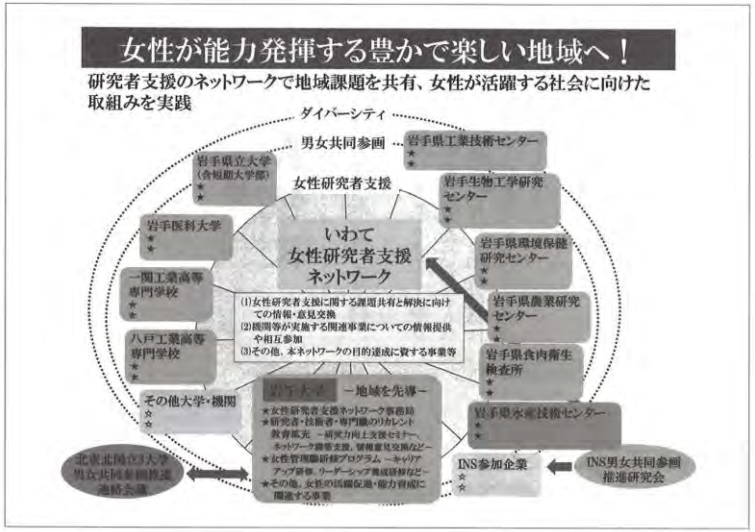


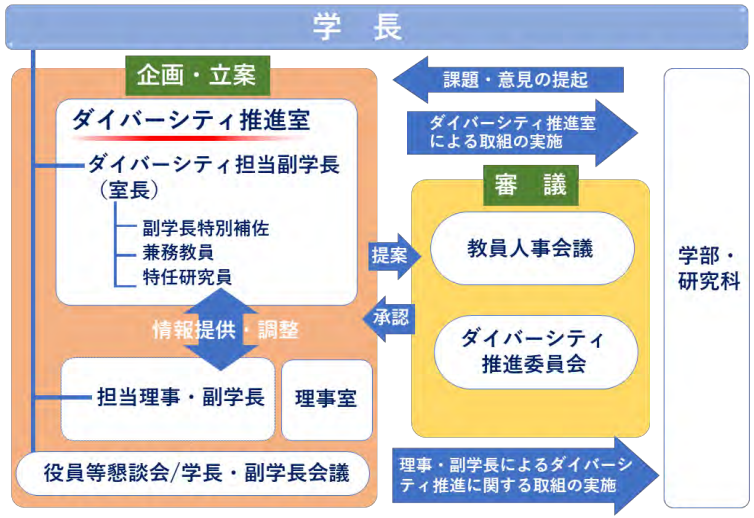
図２　実施体制図

地域部会を含む部会制は2021年度まで継続（左上図）



「いわて女性研究者支援ネットワーク」概念図





2022年度以降（左下図）は、教員人事会議とダイバーシティ推進委員会のメンバーを同一にし、女性研究者増加の加速をはかるとともに、推進室には少数の副学長特別補佐のみを置き、推進室長業務の非属人化・継承をはかった。その分、地域発信が推進室の室長や特任研究員のみが携わる業務になりがち。

理工学部では2025年に女性リーダー育成推進室を開設。山田進太郎D&I財団Girls Meet STEMのプラットフォームも利用して、地域に向けて理工系女性研究職のロールモデル紹介事業を実施。他学部に類似の活動を拡げることが課題。

いわて女性リーダー職研究者ネットワークの前身「いわて女性研究者支援ネットワーク」発足時のポンチ絵（右上図）。「女性が能力発揮する豊かで楽しい地域へ！」がコンセプトだったが、加盟機関は増やせても、各機関の女性人材増加には必ずしもつながらず、女性リーダー職研究者ネットワークへの改組時に、個人加入のピアサポートネットワークへと性格付けを変更。

「岩手理系女子育成研究会（ISG）発足を報じる新聞記事。地域の小中校長・副校長をメンバーに、科学児童書の貸し出しや児童向け理科実験など先駆的活動をおこなっていたが、学校現場の多忙化による新規メンバー獲得困難、補助事業終了によるマンパワー不足などにより、現在は休会状態。

目指せ未来のノーベル賞

理系女子育成へ研究会

リケジョ

県内教員ら 来年度設立

教材や部活動充実

「岩手大理系女子育成に関する小中学校長・副校長との検討会」（会長・川村庸子江釣子中初任者研修拠点校指導員）は来年度、「岩手理系女子育成研究会（ISG）」を設立する。理系女子は「リケジョ」と呼ばれ、近年、専門性や自立心の高さから採用活動などで企業が注目。同研究会は小中高の女子児童生徒の理系への関心を高める教材研究や学校科学部の支援を検討しており、取り組みが注目される。

研究会の設立は9日に盛岡市上田の岩手大で開かれた同検討会など主催の「女性研究者裾野拡大のための教員研修」で示された。

同研究会は、男女による差別のない多様な経験を通して新しい価値を創造し、未来を開く理系女子の育成を掲げる。小中高、大学の教員や女性研究者で構成し、理系への興味・関心を高める玩具や教材の調査・研究、小中高科学部の支援活動などを予定している。

同検討会は同大が本年度まで3カ年計画で行う「共生の時代を拓く、いわて女性研究者支援」の関連事業として昨年7月に設立。県内の小中学校長・副校長が委員となり、同大と共同で教員研修や、小中学校向けの理系女性研究者関連図書の貸し出しなどに取り組んできた。

川村会長は「これまで理系女子が目指す姿は『男性に負けず』や『自立を目指す』など個のレベルのイメージだった。今後は自分を超えた目標を持つ説得力と影響力のある女子が育ってほしい」と願う。

岩手日報
（2012年10月10日掲載）

学内に保育スペース

岩手大 来月から

女性研究者ら支援

盛岡市の岩手大（藤井克己学長）は12月から、学内に保育スペースを開設する。教職員に対する子育て支援の一環で、女性研究者をサポートし、現状では全体の9・4％と少ない女性研究者を増やすことも大きな目的の。施設整備のほか学生を交えた商品作りなども進めており、大学全体で子育て支援への機運を盛り上げる考えだ。

同事業は文部科学省の女性研究者支援モデル育成事業として本年度採択された。

同大では工学部で女性教員の募集公募を初めて行い、今年4月から助教2人を採用して研究室を新設するなど、子育てへの不安から学生もいるなか、以前から言葉となっていた。

同大に対し女性は30人（10年4月現在）と少ない。

学内保育スペースは学生センター棟（仮称）の会議室だった部屋を改修。乳幼児が自由に動き回れるスペースや授乳室、相談コーナーなどを設ける。同大の教職員や学生のほか、隣接して学校している一般市民にも開放する予定だ。

同じ棟の東いず用トイレには乳幼児用の座

岩手日報
（2010年11月1日掲載）

学内保育スペース「ぱるん広場」開設を報じる新聞記事。岩手大学を会場とした学会大会での託児にも利用できる。

INS男女共同参画推進研究会の発足を報じる新聞記事。岩手大学の産学官連携ネットワークINS内の研究会として位置づいているが、母体のINSに女性参加者が少ない、ものづくり系と女性活躍・男女共同参画系の各担当部門の縦割り、などの理由から、コアメンバーが少数固定化しているのが悩み。

女性の能力を社会へ

共同参画推進研究会 産学官連携で発足

盛岡タイムス
（2010年９月17日掲載）

○岩手日報 4面　平成28年（2016）11月16日（水）

女性研究者支援や進

岩手大など連携 整備促

北東北推進会議が発足 環境流交

岩手大（岩渕明学長）は15日、弘前大や一関高専など本県と青森県の5機関と連携して女性研究者の活躍を推進する北東北ダイバーシティ研究環境実現推進会議を設立した。岩手大が中心となり、出産や育児などのライフイベントを考慮した研究環境の整備などに取り組む。産学の枠を超えて研究者同士が交流する機会も設け、女性研究者が能力を発揮できる北東北を目指す。

設立会議は盛岡市上田の岩手大で開かれ、同大と共同実施機関の弘前大、一関高専、八戸高専、東北農業研究センター（盛岡市）、滝沢市に工場を置く製造業・ミクニの関係者約30人が出席。会議規則などを承認した。

取り組みの中心は▽ダイバーシティ（多様性）研究環境の整備▽女性研究者の研究力向上とそれを通じたリーダー育成▽女性研究者の上位職への積極登用―の三つ。岩手大が「ダイバーシティ実現で北東北の未来を先導」をテーマに採択を受けた文部科学省の事業に基づき、年間補助上限6千万円で6年間実施する（補助期間は3年間）。

参加機関の女性研究者が共同研究を通して研究力やリーダー力を磨くほか、女性研究者の裾野を広げるための啓知活動を実施。結婚や出産、育児、介護などと研究の両立に向けた継ぎ目のない支援、女性研究者特有の悩みを相談できる制度の構築などを検討する。

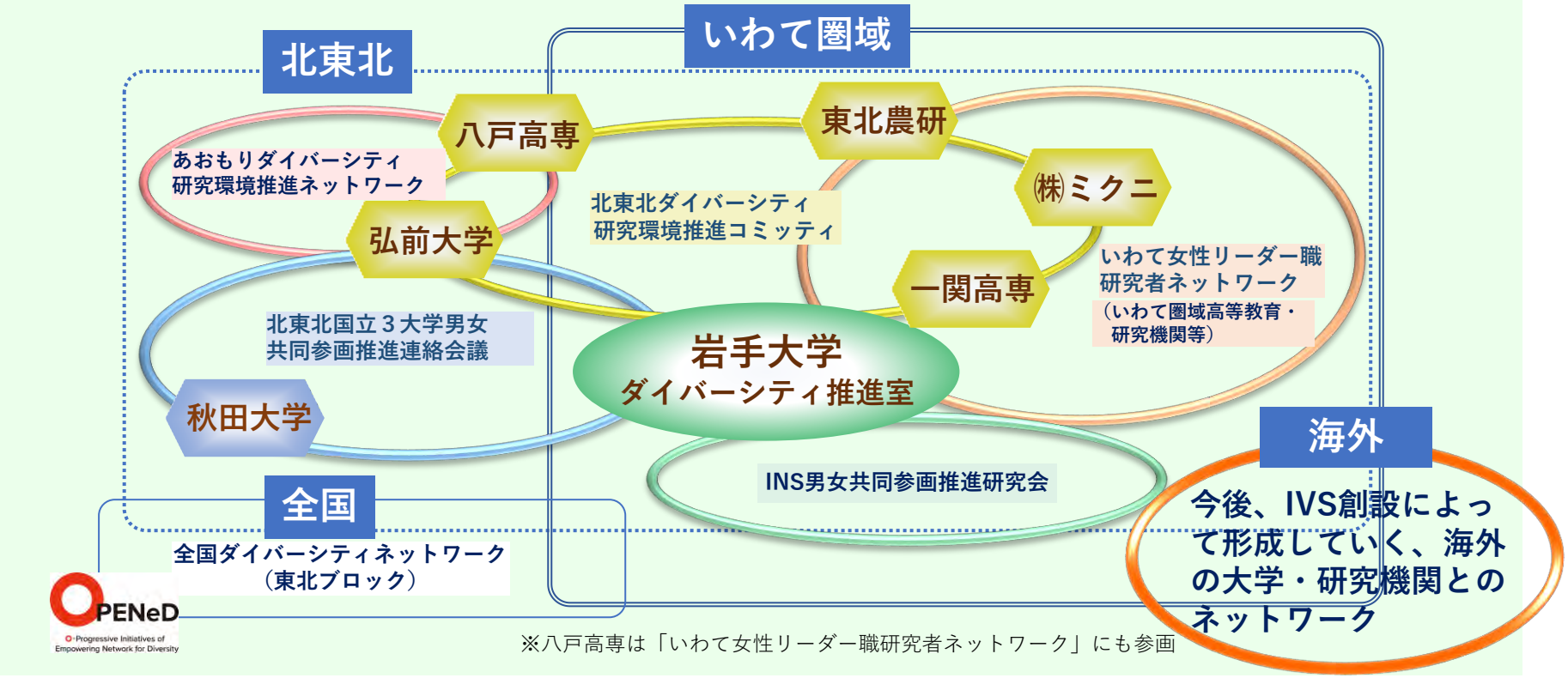
岩手大はこれまで、産前・産後休暇取得支援や学内保育スペースの開設などで女性研究者支援に取り組んできた。共同実施機関が課題や取り組み事例を共有し連携することで、女性研究者活躍に向けた北東北の環境の底上げを図る。

岩手大は5月1日時点で13・6％の女性教員比率を6年間で16％まで引き上げる目標を掲げた。岩渕学長は「社会では女性のトップもおり、大学も変わらないとならない。計画を進めることで北東北のみならず日本全体の男女共同参画推進に寄与したい」と話った。

北東北ダイバーシティ研究環境推進コミッティの前身である推進会議発足を報じる新聞記事。補助事業終了後もネットワーク活動を継続しているが、マンパワーや事業資金の不足が悩み。

岩手大学女性人材育成に関する地域（学外）ネットワークの今後の課題

- 補助事業の先行きも不透明な中、全国ダイバーネットワーク東北ブロックの活動に国内ネットワーク活動を集約し、リソースを集約投下できないか模索中。
- 下記ネットワーク以外にも、山田進太郎D&I財団　Girls Meet STEM事業の加盟大学にもなっているが、上手な外部ネットワークや外部プラットフォームの利用も模索中。
- 海外の大学・研究機関とのネットワーク形成は着手したばかり。単純に先進大学・研究機関と連携するのではなく、岩手と共通した課題（人口流出、強固な性別役割規範等）を抱える連携先を開拓したい。



※八戸高専は「いわて女性リーダー職研究者ネットワーク」にも参画

もうひとつの循環：すずらん基金事業や、女性活躍・ダイバーシティ経営の先進企業や研究者との連携による、地域（学外）発信

・岩手大学女性活躍・ダイバーシティ推進基金「すずらん基金」を、補助事業終了後の資源確保のために2021年に設立。寄付募集の企業回りや市民向けイベントを開催し、岩手大学のダイバーシティ推進の取り組みを知ってもらう機会に。基金のアイコンは、地域女性・児童の栄養改善に尽力した先駆的女性研究者、鷹觜テル。クラウドファンディングも実施し、パープル・ライトアップの投光器を購入するなど、地域発信自体とその資源確保の両方をねらう。

・先進企業（NTT東日本）のノウハウを提供してもらっての、女性リーダー育成教材動画の共同企画による制作、動画を使ってのワークショップ開催。動画出演者には、地域企業の専務やNTT東日本の執行役員、『日経ウーマン』元編集長の大学教授を迎えた。

・「女性のキャリア形成支援リカレントプログラム」を市町村と共催で開講。受講生がすずらん基金の寄付募集企業回りの窓口になってくれるなど、岩手大学のダイバーシティ推進の応援団に。地元企業が女性人材のリカレント教育に必ずしも積極的ではないのが悩み。